

診療最前線

形成外科



形成外科は、皮膚など体の表面のけがや病気を治療する診療科です。当科で扱う主な疾患をご紹介します。

外傷

やけどや顔のけが（すり傷や切り傷、鼻や頬骨などの骨折）、手足のけが（骨折以外の皮膚軟部組織損傷）の治療を行います。自己判断により適切な治療が遅れると、ひどい感染を起こした

り、治るまでに長期間かかってしまう場合があります。やけどやけがをした場合には、できるだけ早く医療機関を受診することが大切です。



顔のやけど（上）
治癒後（下）

皮膚・軟部組織腫瘍

粉瘤ふんりゅうや脂肪腫、色素性母斑（ほくろ）などの良性疾患の切除手術を行っています。傷あとができるだけ目立たなくなるよう切開、縫合法を工夫し、抜糸後のアフターケアの指導も行っています。



粉瘤（上）
色素性母斑（下）

扁平上皮がんや基底細胞がんなどの皮膚がんの中には、良性疾患とよく似た外観のものもあります。



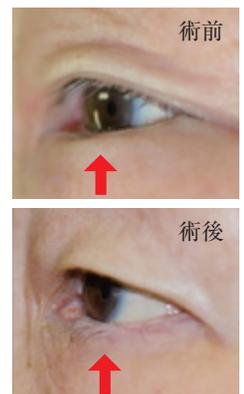
扁平上皮がん（上）
基底細胞がん（下）

皮膚がんが疑われる場合には、必要に応じて組織生検を行います。切除手術によって大きな組織欠損を生じる場合には、皮弁法や皮膚移植を行います。

まぶた（眼瞼）の病気

まぶたが垂れ下がりを目を開けにくい状態を眼瞼下垂（がんけんかすい）といいます。後天性のものは、加齢やコンタクトレンズの長期使用、眼をこする癖などが原因となります。

睫毛内反症・眼瞼内反症（逆さまつ毛）は、まつ毛や皮膚が内側に向き、眼球の表面にあたる状態をいいます。痛みや異物感、眼の充血や目やに、流涙な



下眼瞼内反症

どの症状を生じ、視力が低下することもあります。いずれのまぶたの病気も、手術を行うことで症状の改善が期待できます。

爪の異常

巻き爪は、靴による圧迫や歩行の頻度、歩き方のバランスなどが発症に関与している可能性が指摘されています。ひどくなると、痛みや炎症を起こし、歩行困難となったり転倒する危険性が増したりします。当院では、形状記憶ワイヤーを用いて爪の矯正治療を行っています。



巻き爪（上）
陥入爪（下）

陥入爪は、爪の端が皮膚に食い込んで痛みや炎症を起こす状態です。皮膚が赤く腫れ、不良肉芽を生じます。テーピングや軟膏治療などの保存的治療で改善しない場合は、局所麻酔下で食い込んだ部分の爪を除去するなどの処置が必要です。

美容診療

形成外科では、平成28年10月より美容診療を開始しました。主に、しみ、くすみ、こじわ、肌荒れといった加齢に伴うお肌の悩みや、いぼ、ほくろなどに対する治療を行っています。

◆**しみの治療**

「しみ」と言っても、様々なタイプのもがあります。老人性色素斑（日焼けによるしみ）、肝斑、雀卵斑（そばかす）、やけどや外傷後の炎症後色素沈着（黒ずみ）などです。しみの中で最も相談が多いのが、紫外線の影響で生じ年齢とともに増えてくる老人性色素斑です。

それぞれ効果のある治療法が異なります。トレチノインやハ

イドロキノンなどの外用薬、トラネキサム酸やビタミンCなどの内服薬、機器を使用した治療など、症状に応じてこれらの治療を組み合わせる必要があります。



老人性色素斑

◆**中周波治療器を用いたしみ治療**



中周波治療器 (デルマトロン®)

しみに微量の電流をあてることで皮膚のごく浅い部分を熱凝固させ、しみを薄くしていきます。治療後は一旦かさぶたができてきますが、1週間前後で自然にはがれます。治療後すぐに洗顔、

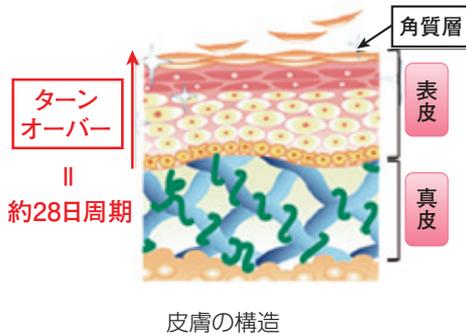
お化粧品ができ、軟膏を塗ったりテープを貼る必要はありません。1ヶ月ごとに3回程度行います。この治療は老人性色素斑など表在性のしみに効果があります。



中周波治療器によるしみ治療

◆**ケミカルピーリング**

肌の新陳代謝、生まれ変わりのことをターンオーバーと言います。表皮の一番深い部分の細胞分裂により、新しくできた細胞が徐々に上へ押し上げられ、最後は垢あかとなって剥がれ落ちます。



皮膚の構造

加齢や紫外線、ストレスなど様々な要因によりこの周期が崩れると、しみやくすみ、こじわ、にきび、毛穴の開きなどといった肌トラブルの原因となります。

ケミカルピーリングとは、皮膚に薬剤を塗布して表面の角質を除去し、ターンオーバーを促進させる治療です。しみやくすみの軽減、にきびや毛穴の開き、皮膚のごわつきや乾燥じわの改善などの効果が期待できます。



ケミカルピーリング

美容診療は自費診療となりますが、症状によっては保険治療をお勧めする場合があります。予約制とさせていただきますが、症状の気になる方はお気軽にご相談ください。

(形成外科医長 宮澤季美江)